ひかりのこ

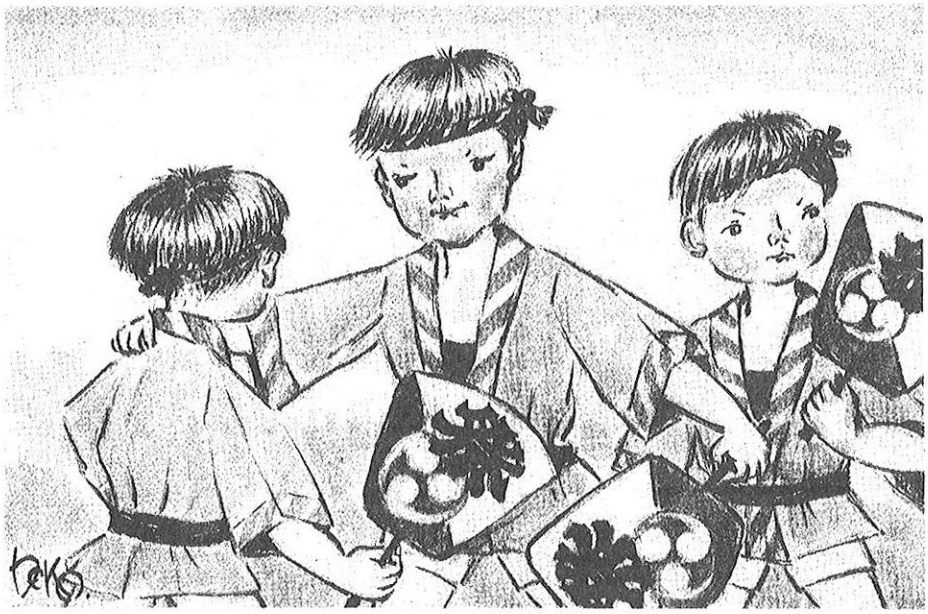
光の子

No.67　1996. 8. 1.

● 賜物を生かして互いに仕えなさい（ペテロの第１の手紙第４章10節）

残暑お見舞い申し上げます。

社会福祉法人光の子どもの家
理事長　福　島　勲



「夏祭り」　　え・中島英子

雲の峰

塗畦に朱をつくしゐる夕日かな
絵タイルに満帆の船夏来たる
一村を水音つつむ合歓月夜
くちなはの脱ぎし衣には目もくれず
鮎釣りにせはしく動く山の雲
雲水の吹かれて通る青田かな
学校の蛇口一列雲の峰

黛　執（『春野』主宰）

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　　ＴＥＬ／0480－72－3883　　振替／00130－１－128022
編集／光の子 編集委員会　　〒349－11 北埼玉郡大利根町砂原277　　印刷／社会福祉法人 共愛会

エデンの園の蛇

創世記　第３章１～24節

理事長　福島　勲

理想の園エデンに蛇が居た。

神が造られた生き物の中で、蛇は一番賢いものであった。蛇は悪いものとは書かれていない。

悪いものが造られてエデンの園にいたとなると、話がこんがらかってしまう。神が悪を造られるはずがないからである。

蛇は古来諸民族の間で神的性格を付与されて崇拝される面と、逆に嫌がられ、恐れられて排斥される面との二面がある。

蛇にちなんだ話は日本の八又野大蛇はじめ、中国の竜、ギリシャ神話の海蛇、アレキサンダ大王誕生にからむものさまざまであるが、（大林太良・北の神、南の英雄）、奇怪な話が多い。

エデンの園の物語は人間の堕罪の神話であろう。

神の創造の原点では、人は性善である。しかし現実の人間は殺人や虚偽、不義、不敬虔の塊であることを創世記の記者は、見過ごしには出来なかった。

この善なる者から悪なる者への移行、堕罪に蛇が介在するわけだが、問題は、人間そのものが善と悪、聖と俗の両面を保有する存在と言うことである。

エデンの園は言ってみれば、人間そのものの縮図、あるいは投射、投影に他ならない。

食べてはいけないとの神の命令を守り得る、また守ろうとする聖なる面と、食べよとすすめる蛇的悪行が相克し、ついに聖は俗に、善は悪に打敗けて失楽園の憂き目を見るのである。

エバは私が禁を犯して、この木の実を食べましたとは言わない。蛇にだまされて食べましたという。（一三節）、違犯の責任を負うことはせず、責めを蛇に着せようとする。

何故エデンの園に蛇が存在することが許されているのか、自分の堕罪の責任は神にあるとさえ言いかねない弁明である。

このように自責の念の喪失した、堕罪についての楽天家がいかに多いことか。いなすべて人は罪に対して楽天的である。

蛇はキリスト者個人のうちにも、また教会という地上の組織の中にも潜んでいる。

ひたすら俗化の一途をたどる人間界の、創造の原点に、エデンの園化への回帰をどこにみるのか。

もはや、宗教の時代ではない、キリストの時は過ぎ去ったと言った世評に踊らされてはいないのか。最も恐ろしい蛇的誘惑である。

蛇に関して今一つ異なる事件が起きている。

モーセがイスラエルの民をエジプトから導き出し、荒野に彷徨した。民らは苦難に耐えかねて、神とモーセに逆らった。神は炎の蛇をつかわし人々を咬み殺させた。モーセは青銅の蛇を造り、旗竿にかかげた。これを仰ぐ者は、死ぬことなく生命を得たということである。（民数記・二十一・九）

ヨハネはこれを引用して、人の子（キリスト）も木に架けられ、これを信じる者は皆、永遠の生命を得ると、キリストの十字架の救いを説明する。（ヨハネ・三・十四）

エデンの園で堕罪を誘発した蛇と荒野で救いを全うする青銅の蛇とは全く趣を異にするが、この対照とこの蛇の援用は、まことに興味深いものがある。

カトリックの学者、M・エリアートは、広範囲に亘って聖と俗について説いている。神学的に問題があろうかと思うが、非聖化の段階にある現代人の救いが、キリスト教信仰以外にないと、故郷東欧の現実を踏まえながら断言する。（風間敏夫訳・聖と俗・堀一郎訳・永遠回帰の神話）

われわれも、ためらうことなくこの主張に賛同せざるを得ない。

２つの文化に生きる
1

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

早いもので私が石橋を叩いて国際結婚という大きなガードルを乗り越えてからもう十六年が過ぎようとしている。夫も在日十七年、流暢な日本語で、日常会話には困らない程度になっている。

結婚後四年目に生まれた息子は十二歳、その下の娘は九歳とすくすく育ち、しっかりバイリンガルの世界に生きている。子どもたちをはじめ、わたしたち夫婦も、ふたつの文化を持っていることへの違和感がなくなったのか、その使い分けがうまくなったのか、ある種の諦めもはいっているのか、よく分からないが、物事が以前よりスムーズに行っているような気がする。

確かに日本社会全体も少しずつ変わってきていると思う。夫が来日した当時は、一歩、家から外に出ると、見ず知らずの子どもたちに片っ端から「ハロー」攻撃を受けた。子どもたちが夫を見て、外国人だと気づき、面白がって「ハロー！ハロー！」と言うのである。最初のうちは「ハロー」と答えていた夫も、子どもたちが会話を交わそうとしているのではなく、ただ面白がって、「ハロー」を連発しているのを聞いて、「失礼だ。ぼくはまるで動物園の檻の中にいる猿みたいだ。」と、よく怒った。テレビで明日の天気予報を見ている時、「朝は沿岸地方はハロー（波浪）注意報が出ています。」というのを聞いて、「埼玉は海はないけどハロー注意報を出した方がいいんじゃない？」などと冗談を言い合ったのを覚えている。

そう言えば、「あっ、外人！」と言って、大ぴらに指を指す人を最近は見かけなくなった。これは少しづつだけだけれど、日本社会はよい方向へと向かっている証拠だと思う。私の方も以前は、興味津々に「外人さんと結婚してるのぉ？」という問に、何となく曖昧に「ええ、まあ。」と言っていたのに最近は、「はい、私の夫はアメリカ人です。」とはっきりと答えるようにしている。外人さんではなくてアメリカ人なのである。よく話題になることだが、この外人という言葉も変な言葉である。いくら外人さんとさんをつけてもやはり意味は外の人。明らかに差別用語である。日本で生まれて日本語を話し、黄色人種で髪は基本的には黒系統、目も黒でないと日本人と呼ばれない。それでは親子三代も日本に住んでいる韓国人はどうだろう。在日韓国人である。他にも在日中国人、在日フランス人等といくらでもいる。

アメリカの場合はどうだろう。よく言われるようにアメリカはさまざまな国から人々が住み着いたこともあって、いちいちその人たちを外国人と言っていられない。アフリカ系アメリカ人、中国系アメリカ人、スペイン系アメリカ人、とみんなそこに住んでいる人たちはアメリカ人と名前がついている。日本も中国系日本人とかアメリカ系日本人とか言えるようになったらもっと国際社会に近づくのにと思うが、今一つ文化的に受け入れられないところがある。

日本では、住んでいる人は同じ人種で当たり前。違う人はお客さん、というか枠からはずれているのである。その点アメリカでは、人々は違っていて当たり前、人種も様々で当たり前なのである。

娘が去年のいつか学校から帰ってきて「お母さん、私ってアメリカ人？日本人？友だちがどっち？って聞いたから日本人って答えといた。私は日本で生まれたし、お母さんも日本人だし。」と私に言った。娘は友だちの仲間に入れてもらいたい一心で日本人と答えたのだと思うが、私はその時、「あなたは日本人でもあるし、アメリカ人でもあるのよ。ふたつあってラッキーだね。」と答えた。ふたつの文化を持っていて大丈夫、いけないことは何もないのである。

先日、嬉しい知らせがあった。中学に上がったばかりの息子が学校で日本語の弁論大会と英語のスピーチコンテストの両方のクラス代表に選ばれたというのである。あの内気な息子が、と親は少々びっくりしてしまったが、これも彼が持っている両方の文化が受け入れられた証拠なのでは、と心から微笑しく思い、私たち夫婦も勇気づけられたひとときだった。

エッセイ

天王様

県立高校美術教諭　中島　睦雄

東の通りを、北の方から太鼓の音が近づいてくる。七月十五日、天王様の最終日である。

数十年前の天王様の主役であった私たちも、すでに形を変えて伝わっている天王様の行事を、今は見守っているだけである。そして、恐らく、われわれの世代が共通して思っていることは、その変わり方の大きさであろう。

先ず太鼓のリズムが変わった。古いリズムは、こうである。

ドンカカドンカカドンドンカッカカ
ドンカカドンカカドンドンカッカカ
ドンカドドドンカ　ドドドドンカ
ドドドンドンカ　ドンカドンカ
ドンドドドンカドン　カカカッカ
ドンカカドンカカ・・

ところが。現在の太鼓のリズムは、何となくあやふやで頼りない感じである。これが変わったものの一つである。

お祭りというものは、本来神と人間とのかかわり合いによって行われるものであろう。そうであれば、神に対する人間の心の変化によって、どのようにでもお祭りの形が変化するのは当然である。

もう一つ、変わったものは、天王様の運営のすべてを、かつては子どもたちだけでやっていたことである。したがって、矛盾に満ちた古いしきたりが続いていた部分もあった。現在は大人の人がいろいろと世話をしてくれているようで、合理的な運営になっているものと思われる。

しかし私は、今になって考えてみると、私個人にとっては、あの古い非合理性や矛盾が大変に良かったと思うこともある。

たとえば、トンボ洗いである。

七月五日だったか、天王様の初日なのだが、その前にどこからか連絡が来てトンボ洗いに行くのである。天王様をかつぐ縦横の棒をトンボと呼んでいたのだが、神社の物置からそれを出して、みんなで近くの池まで持っていく。そして、水浴びをしながらトンボを洗うのである。

小学校の何年生頃だったろうか、私は初めて風呂以外の水に、この時入った。もちろんプールなどという物のない時代だから、水に親しむ、水に入る、泳ぐなどということの最初のステップを、このトンボ洗いによって経験させられたのである。江戸時代の洪水によって出来たのであろう池を使うのだから、水から上がる頃は、身体中の毛に、足といわず手といわず、水あかが付いているのである。現代では考えられないような非衛生的なにごり水の中で、私たちは遊びながらトンボ洗いをしていたのだった。そして、そのにごり水が原因で病気をしたという人の話は聞いたことがない。その反面このことを通して水に親しみ、それが水を泳ぐきっかけになったという人は、私だけではあるまい。

天王様に関わる非合理性が、私にとって良かったと思われるもののもう一つは、賽銭の配分の仕方である。

天王様に関する一切の権限は、最上級生の中のおおぜいにんという人たちが握っている。おおぜいにんというのは、大世話人とでも書くのかも知れない。小学校の一年生の時から天王様に参加し、しかも一日も休まなかった最上級生のことである。

この人たちが賽銭の配分を決めるのだが、これが極端に上に厚く下に薄い。もち論、その配分の額は公表しない。小学校の一年生などは天王様の後に列を作って、大声で「アイヨアイヨ」とかけ声を出すのである。真夏の炎天下、かくらんでもしそうな状態の中で、必死に声を出している下級生に対し、少し声が小さくなると「一年生と二年生は声がチッチャイドー」と、おおぜいにんの怒声が飛ぶのである。五年や六年になると、天王様をかつぐことが出来たと思う。これはこれでまた大変である。肩の皮が剥けてしまう程の重さをこらえて、それでも、そのことが自慢であった。

こんな苦しみを越えて最終日にもらう賽銭の配分が、実に落差のすごいものであった。

私は、このような事がらを通して初めて、子どもではあるが人間の集団を知った。そして、矛盾や不公平、苦しみを知りつつ集団の中のひとりとしての存在を確認していたと思う。そして、現実の人間の社会が、決して神が望まれる通りの立派なものでないという事を、少しづつ知らされていたのではないかと思うのである。

学者もどきのつぶやき ㉓

老　い

山形大学医学部教授
仙道　富士郎

"老い"などというタイトルで文章を書き始めると、理事長の福島先生に「二〇年早いよ」と叱られそうではある。

しかし、生理的な年齢と精神的なそれはあまり関係がないようにも思える。

三男に子どもが出来、愚妻は広島に出かけ目下おさんどん中である。食事の用意をするのはどうということもない。

そもそも小さいときから男子厨房に入っていた組だから、愚妻が使い忘れた材料を冷蔵庫から取り出して、世界中で初めて作られたであろう料理を試作しては悦に入っている。それほどまずい味とも思えない。

明日の土曜日には柔道部の新入生歓迎コンパの流れが、夜の一〇時過ぎに三〇人ほど狭い我が家にやって来る。

いつのまにか、彼らは小生の作るカレーライスを我が家で食べることを風習にしてしまい、妻は不在ながら明日も作るつもりである。たまねぎを炒めるのはかなりの労働力を要するが、学生が三人手伝いに来るから何とかなるだろう。

ただすこしく困ったのは、どうもすべてのことがおっくうなのである。

そもそも、お祭り騒ぎが大好きで、人の集まることがあると一週間も前からソワソワしている方である。

小生の教室はいわゆる基礎医学の講座に属しており、臨床医学の教室から勉強に来ている大学院の学生が大勢いる。

適齢期の人が多く、これまでに何人もの諸君が在室中に、あるいは臨床に帰ってから結婚した。

いつのまにか披露宴でのわが教室の余興はすっかり評判になってしまい、必ず出演要請が来る。

教室の秘書の披露宴の時のことである。

てんとう虫のサンバを合唱することになり、ただ歌ったのでは面白くないということで、赤と緑のてんとう虫の張り子をひとつづつ一週間もかけて作り、歌に合わせて張り子を背中に背負った二人がスポットライトを浴びながら両袖で踊った。

司会をしていた新郎の同僚の高校教師もさすがにあきれてしまい、「山形大学の医学部では本当にちゃんと勉強しているのでしょうかね」といい出すしまつであった。

ところが、最近大学院の学生と小生の年齢差がわが子とよりも離れるようになり、けむたいのか、あまりそのような話は私のところまでは届かないようになり、また私もあまりそういうことに気を遣わないようになってしまった。

それにしても、この寂しさはいったいどこから来るのだろうか。

朝、六時前にひとりで目を醒まし、漫然とテレビに目をやっていると時間はあっという間に過ぎてしまう。

近所からいただいたちまきを電子レンジで温め、残っていたワラビのお浸しを切って数分の朝食を終える。

自分を元気づけるように、シャワーを浴びる。昨日と今朝の分の食器を洗う。シンクの高さが男には低すぎるのか、少し腰が痛い。痛む腰を曲げる姿勢をとり続けながら、ふと、妻に先立たれてひとりで食器を洗っている自分の姿を想像した。

「人は皆つまりはひとりなのだ。」といい聞かせてみる。

それに、こんなに酒を飲んだり、たばこを吸ったりふしだらな生活を続けていて妻よりも長生きするはずもない。

いや、そういうことではなくて、妻が残ったとしても、やはり寂しいに違いないなどと勝手に想ってみたりする。

そもそも深酒などをするからいけないのだ。昨年あたりから、深酒をした次の次の日、つまりは三日酔いがひどくなり、深い鬱状態に陥ることが多くなった。

精神科医の教え子が離任の挨拶に見えたときにこの話をしたところ、あまり続くようならと抗鬱剤の名前を教えてくれた。

さすがにこわくなってしまい、それ以後は一〇時以降は水だけにと決めていたのだが、一昨日は大学院の学生を相手に十二時過ぎまで飲んでしまった。

プ・リ・ズ・ム

原田家日記

この四月から光の子どもの家の保母となり、中二の将司、小四の信一、幼稚園年中の佳美の三人の子どもたちの担当となりました。

見も知らない者同士が暮らしを共にすることの大変さを身をもって知らされた四カ月でした。それは、信一にとっても同じことだったのでしょう。はじめの頃は庭でサッカーボールを蹴り合ったりしてお互いの様子をうかがっていました。

そのうち、日を重ねるごとに実に多様な試みが続きました。

特に信一は、殴ったり蹴ったりという暴力的な表現が多く、ケース記録などから言語を多く持たない家族の家庭での表現を身につけていて、それが、担当者の変更というピンチの時に出てしまうのだろうことが推測されました。ようやく信頼関係が出来つつあった担当者が、結婚で退職し、自分のせいではなくて生活する相手が変わっていくことへの不安や不満が重なり、やりきれない気持ちを、少し関係が出来てきていた私にぶっつけてきたのだろうと思います。手加減を知らない信一は、時には狂ったように私を攻撃します。

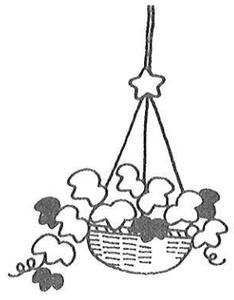
「気持ちが晴れるまで叩いてもいいよ。」覚悟を決めて言いました。信一が持っている心の痛みを私にぶつけて私も痛み、それをお互いに耐えながら新しい関係が出来ていくのではないかと思ったからです。

ある夜、最も烈しい攻撃にさらされました。あまりのことに思わず涙が流れてしまいました。この涙をどうしよう。うつむいたまま考えました。単なる痛みではなくて、私も信一も不安でたまらなかったのです。そんな不安をありのままに見せるべきだと思い、信一と向き合いました。

その時に初めて何か表現できないような空気が信一との間に流れ、確実に信一も感じとったようです。

翌朝、「夕べはごめんね。」と、悪びれもせず顔をまっすぐに向けて信一は謝りました。それからの信一との関係は落ち着いたものになり、本来的な優しさを言葉や行動で示すようになりました。

夏休み、そんな関係を深めていきたいと思っています。木部すなお



河のほとりで

旗井の家

部活動にもまじめに参加し、中間試験も期末試験もがんばり赤点を取ることもなく、落ち着いた生活をしていた嬉だったが、夏休みを目前にして帰宅の遅い日が続いた。

そんな彼に「夜遊びが続くようであれば本園に帰ってもらわないといけないよ」という話をした。これまでの彼であれば担当者のそんな言葉に対し暴言を吐いたり、ものに八つ当たりをしていたのだが、そんなこともなくなり、おとなしく担当者の言葉に耳を傾けるようになった。

そんなやりとりの最近だったので少し安心し、彼もきっと分かっているんだ・・と信じ、それ以上は口を出さずに彼の生活をじっと見ていた。しかし、その後も十一時過ぎの帰宅が続き、ある日とうとう無断外泊があった。彼は次の朝早く帰ってきた。黙って見過ごすわけにはいかず、「こんな生活を続けるなら私はあなたに責任を持てないから大人の目がたくさんある本園に戻ることを本気で考えてちょうだい！」と伝えた。

その時には神妙にしていた彼だったが・・。夕方、また出かけようとしている彼を見とがめて「今日ぐらいはおとなしく家にいなさい、きちんとするつもりならそれを態度で表さないと分からないよ！」と言うと、『うるせぇ！』と、彼、「本当にここにいられなくなるよ。」『ああ、てめえのせ～でな。』・・久しぶりで聞く彼の暴言だった。

結局彼は出かけ七時ごろ帰宅。彼から謝罪はなかったが、珍しく本園に学習に出かけた。

翌日、私の用意したスポーツドリンクと弁当を『ありがとう』と受け取り部活へ。一時半頃には帰宅し、夕方から家庭訪問に出かける私の留守を守ってくれた。夜中の零時近くに帰宅した私を寝ないで待っていてくれ、『倉ちゃん、この間スゴイこと言っちゃってごめんなさい。』口下手の彼が真顔で謝罪した。「うん、分かってくれればいいよ、私も言い方気をつけるからさ。」

疲れがスッと抜け、いい気分でその一日を終えた。　倉沢　智子

光の中で

佐藤家

『いちごパン事件』

毎週水曜日には、木曜の朝食のためのおいしいパンを生協が運んでくれる。おいしいいちごパンが到着したある水曜日。大人たちのすきを見て、ベビーギャング三人組が、いちごパンのほとんどとステイックパン二袋をものの見事にたいらげられてしまった。おたずね者は、二歳の得哉、三歳の洋、貴樹。

この事件は佐藤家を揺るがせた。

三人への非難の嵐が吹き荒れ、いつまでも、ことあるごとに二波三波と繰り返すのである。げに食べ物の恨みは恐るべし。もっとも、一番ネに持っていたのは他ならぬ私だったかも知れないが・・。

高校時代、古文の授業で、人間は生まれたときから悪という『性悪説』か、生きていく中で悪を知るという『性善説』のどちらかという問に、私は『性悪説』と答えたことを思い出す。教会へ通っていたので、人は生まれながらにして罪人で、神に出会い、赦されて和解し、本来的な生き方をするようになる、ということを結びつけたからであった。

小さなうちは、可愛い悪戯に見えるが、大きくなると大変だ。ことは大きいか小さいかだけで、根本的には同じである。今のうちに本音とて前などを使い分けたりしないで、善悪の基準をしっかり伝えなければならないと思った。もちろん、空腹で飢えているようなことは全くないので、心の飢えや心理的不足などを考慮して、関わりを深めながら。

いちごパン事件は今も話題に上る。それでもベビーギャングたちのイタズラは続いている。　神田　幸枝

子どもたちの季節

仙道家

梅雨の合間のある土曜日の午後、五・六年生が夏の行事へ向けて庭の草取りをしていた。一段落してご褒美のアイスクリームをみんなで食べていると、小三の詩美が、「私もアイスクリームを食べたい」と言い出した。「これは草取りをしたご褒美だよ」と言って聞かせるが「食べたい」といい続ける。無理もないと思い近くの店へ百円玉を握りしめて二人でいく。しかし、お休みだった。

詩美は近くのスーパー「フレンド」までいこうと言い出した。その三〇分後職員の話し合いがあり、『フレンド』までは大人が自転車をとばしても往復三〇分はかかってしまう。

「残念だけど今日はあきらめよう・・。また今度にしよう。」と私。「イヤ、大丈夫、超スピードでいくから。」と、譲らない。負けて私は、「いい、ホントに超スピードだよ。」と念を押してペダルを踏む。詩美の後を私が追って自転車を走らせる。言い分を退けられて、少しイラだちながらせかす私の前を、全力を振り絞って詩美は自転車をこぐ。何と往路は一〇分で着いた。二分で買い物をすませ帰り道を急ぐ。私を気づかってか、わがままを思ってか往路よりも詩美はがんばった。顔を真っ赤にしてペダルを踏み続けた。その頃、イラだちは消え去って詩美のがんばりに感動すら覚えていた。いつのまにか笑顔になっていて、「すごい、すごいよ。早いね。」と声援を送った。復路は八分で到着！

暑い暑いと言いながらアイスクリームを食べる詩美の隣で「詩美ちゃんすごかったんだよね。二〇分でフレンドまでいってきたんだよね。」と、そばにいた笹山保母に報告する。「もー疲れたよ」と、言いながらも満足が重なったよい表情をして誇らしげな詩美であった。

ここへ来て三カ月。私は子どもたちのどれくらいを見てきたのだろう。そして私自身をどのくらい見せたのだろうか、とふと思う。

こんな些細とも思える時を重ね、お互いが自分らしい姿を表現出来るようにと願っている。　藤本　曜子

現場から

のびやかに ふくよかに Ⅷ

笹山 恵理

今でも心から血を流しさまよい続けている鷹貴君！君は今どこで何をしているんだろう。

この三月、最初から君を担当してくれた保母さんが退職し、君や珠弥ちゃんの後任の担当を誰にするかで、何度も職員は話し合いました。

私はとんだ思い上がりではあったけど、君と珠弥ちゃんの担当を私がやりたいとずっと思っていました。

そしてそうなって、私はまず君だと思いました。グループの中で一番年上の君を、加えて、家族との関係が濃いとは言えない君を最初に受け入れていこう・・私はこの考えを信じ、君の拠り所となれるように、そして、とても思い上がった熱意だけど、君の家族になろうと考えていたのです。

君が、最初に家に戻らなかった日に、一晩中外で待っていたことを君に告げたとき、少しだけ驚いた表情をしていましたよね。〈君のいない家で私は暮らせないし、暮らしていたいと思わない〉ということをその日、私はたくさん口にしたけれど、また君は家を出た。私は君を追って駅まで行って夜が明け、ラッシュアワーが過ぎ、昼、そして夕方まで君を待っていたのを、離れたところで君は見ていたんだよね。

私は君に、君を心配して待っている人がいることを伝えようと、それだけを考えていました。

珠弥ちゃんもいて、美季もいて、他の子どもたちも職員たちもいる中で、いろいろなことに配慮して行動しなくてはいけない身の上だったのに、私はそのことしか本当に考えていなかった。結果として、君には何が伝わったのだろう。その後も君の前に私は自分の無力さを思い知らされ、〈君に何も伝えることの出来ない自分〉という考えに私ははまってしまいました。

何も伝えられないと思いこみ、そのあせりとむなしさをいいわけに、私は君へのアクションの質も量も減らしていってしまいました。

たかだか一・二カ月程度の関わりで、伝えられないという苦しみから逃げてしまった・・。

でも、もしそこであきらめないで、もう何カ月か続けていたら・・。それでもダメなら一年でも三年でも続けていかなければ、君の心に近づくことは出来ないのだろう。

でも、その時に私は負けてしまっていた。君に負けたのではなくて、自分自身に負けていたのだった。

君から離れると言うことは、担当者としての位置を離れることであり、ひとりの担当者が三・四名の子どもに家族のように関わるという責任担当制をしいているこのシステムの中で養育者として、人間として負けてしまっていた。負けてしまった言い訳は探すまでもなくいくらでもある。

でも、何故、負けてしまったのだろう。私が負けてしまったら、拠る辺をすべて失ってしまったと思い、自信を全くなくしてしまったと思いこんでいる君の、誰が拠る辺となれるのか。

そして君は今でも迷い苦しんで心の傷は血を流し続けているのだろう。希望となるものを全てなくしたと思いこんで、思いこまされて、為すすべもなくいるんだよね。

でも私は、君がどうあっても給料をもらい、のったりと暮らしている。君がいない光の子どもの家に私はいないと最初に君に告げた。その言葉通りに私は行動すべきだったね。もし赦されるなら、もう一度君にそう告げて、そのように動きたいと思うけど、いろいろ思いめぐらせると、やっぱりそうはできないのだ。

でも、君はどうなるんだろう。

聖書の中に迷った子羊の話がある。私はクリスチャンではないが、君を思う時にいつもこの話を考える。一匹の子羊が道に迷った。羊飼いは他の羊を安全な場所に置いてただ一匹のために危険をかえりみず、危険な荒野に探しに行く。

今どうしていいのか為すべきことを見失ってしまった君を、他のものを顧みずに探しに行って取り戻して来たい。勝ち目がなくても、手遅れでも。君の心から流れ出る血を止めるには、誰かが君だけに一心不乱になって関わらないと、何も伝わらないことは少なくてもこれまでのことで分かったのだから。

しなければならないことの全てを為すことが出来なかった私だけれども、私はそのうちのいくつかかは、ほんの小さなことだろうけれども、少しづつしていこうと思う。

帰ってきた時に伝えるたくさんのことどもの中の、私の出来るわずかのことを伝えたいと願いながら、その準備をしつつ、君を待っている。

今は、それが私の全てのような気がしている。

養護メモ 62

家族 その十七『情緒16』

菅原 哲男

「すみませんでした。もう、光の子どもの家にはおれません。お父さんのところへしがみついてでも帰らせてもらって、そこで仕事をします。だから、先生、お父さんのところへ連れていって下さい。」

五月末の深夜二時過ぎに、家出をして補導されたパトカーで私の自宅に連れて行ってと警察官に頼んできたという丈は、うなだれていた。

学校の帰りの友だちと出会って話し込み遅くなってしまった、などほんの些細なことから家に帰りにくくなる。そして友だちの家を転々とし、それが出来なくなると公園や集会所などに寝泊まりしたという。

ここに来てから十二年目になる子どもである。ちょうど高校入学の年に入所以来担当してきた保母が退職した。担当の変更は初体験であった。

横浜で私たちと同じ年に移転・改築してスタートした旭児童ホームの伊達先生は、丈の話を聞いて、「それはほとんど措置変更と同じ様な状況だったんだろうな」と丈の心理を分析した。

措置変更といっても環境は全く変わらずに、担当者だけが若い保母に変わっただけである。これまでの生活条件は何一つ変わってはいないところでは、「さあ、これから新たな気持ちでがんばろう」とは思うことができないのである。

丈の思いは複雑に揺れたであろう。

四月の高校の入学式にも家出をするという手段で出席しなかった。

思春期は激流のようなものだという。どんなにもがいても立つことが出来ず、どこかの岸に流れ着くか杭にでも引っかかるか、あるいは終着の海に流れ込むまで何ともできないものだという。

そんな激流の中で丈は「父の許へ帰ろう！」と思い立ったのである。

七年前に父は再婚し、双子も含めて四人の子どもが既に鷹貴の母ではない若い人との間に生まれていた。

四年ぶりに父のところへ電話をした。丈の大変な状況を説明する私の電話に、これまでの父にはない真剣な手応えをその時感じた。

長距離の運転手をしている父は、名古屋から深夜に帰着して早朝やって来てくれた。

何とか高校を続ける糸だけはつないでおきたいという父の思いも重なって、父が、「一学期だけでも学校をきちんとしなさい。それが出来なければ仕事というきついことは出来ない。これから夏休みまでがんばれば、迎えに来られるように準備をするから。」といって約束をし、朝食を丈とともにとって帰った。

家族はいつもあたたかくて安らへるように暮らしているわけではない。共にしている時間の多くが鬱陶しい関係であるのだ。

父と母が愛の言葉を毎日語り合っているわけではない。むしろ、何でこの人たちは一緒になったんだろう？と、いぶかるような場面にさえ出くわすことが希ではないのである。

そんな家族だが、重大な危機に出くわしたときの力は想像を超えるのである。言うところの火事場の馬鹿力、に似ているのである。

例えば、いつもうるさいと思っている父が交通事故か重篤な病気などに罹ったときに、反抗に明け暮れていた息子が駆けつけて、「どうでもいいから命だけは助けて下さい！」と、医師に頼んだりするのである。時には、自分の寿命を半分にしてでも父につないで欲しいなどと医師を困らせることさえあるという。

丈が、十年を超える生活の伴走者であった保母を退職によって失ったときに、それまでは感じることのなかった喪失感を持ったのだろう。何をしていいかも分からなかったとする推測は当たらずとも遠くはない。

その喪失感を埋め合わせることが残って引き受けた者たちの責務であると言い聞かせてきた。

埋めきれなかった部分を、丈は父に求めたのだろう。それを父に求めることがほとんど不可能であることを分かっていたとしても。父の重荷になることの罪責感さえ持ちながら、父母からの激しい分離欲求を持つべき思春期に父と共生をするために丈は学校へ行きなおしはじめた。

家族という、そこに生まれ育つことが当たり前な集団から、分けられて隔たった場所で見知らぬ人々と生活を再構成する子どもたちの負い目を共に担う者であり続けたい。

1997年度も
基準外職員確保のため
バザーを行います。
不要品などのご協力を
よろしくお願いします。
送り先：光の子どもの家
バザー実行委員会

中古車ご提供
ありがとうございます。
山家祥三様
八郎潟教会様
感謝

日誌抄 ＝暮らしの風景＝ 1996年 4月1日 ▶ 5月31日

4月　幼児5名（幼稚園1名）小学生10名　中学生10名
高校生5名　在籍総数30名　（男16、女14）

1日　新年度始まる。木部すなお、藤本曜子各保母、村上勇指導員就任。

4日　中央児童相談所にて渥美姉妹、源将司など在籍の長い子どもたちについての関わりの手がかりを求めて依頼した心理再判定を。

○　新高校一年生、奥秩父民宿滝川へ。高校生活への心構えと決意を確認するために。

○　東京電力社内のボランティアグループ『はむこ会』より高校を卒業して就職した2人に祝の広辞苑が。

8日　高校、中学、小学、幼稚園など入園・入学式。進級進学祝をみんなで。

11日　増田和子氏よりミシンをいただく。感謝。

20日　ベルアネックスの社長小山英子氏のご招待でオーチャードホールへクラシックコンサートの一夕。

○　高校一年生の無断外出・外泊や怠学・不登校など不適応行動が多発し、対応に試行錯誤が続く。

22日　4月生の誕生会。すべての出会いを感謝。

23日　とうとう高校1年生が加須警察に光の子どもの家始まって以来の補導を受ける。

25日　地域の無職少年（17歳）の生活相談を本人から受けハローワークなどへの求職活動を支援する。

5月

4日　第10回子どもまつり。高校1年生男子の不安定が続き、外部からのゲスト出演などは要請しないなど規模を縮小して実施。

5日　上田兄弟、母と岩手県宮古市へ従兄弟の結婚式へ。

10日　八郎潟教会へ。懇談会、聖日礼拝奨励奉仕、スバルレックスの献品受領のために菅原が。12日まで。

11日　川口乳児院より2名来訪して善綿兄弟などとの時を。

12日　東大宮教会の関根氏よりケーキをたくさん。感謝。

13日　富士見乳児院より保母3名来訪し3月に入所の阿蘇佳美ちゃんと再会し遊んで下さる。

15日　光の子どもの家後援会役員会。

○　いつも熱烈ご支援の加須市の梅沢三保氏より餃子をたくさんいただく。ありがとうございました。

18日　岩槻教会青年会の方々が子どもたちと遊んで下さる。

○　土井久美子氏より生活用品をたくさん。

22日　ボランティアグループ「KIDS」のご招待で幼児4名がディズニーランドへ。楽しい一日。

23日　笹山グループ原田家より仙道家へ引っ越し。

26日　前職員鈴木由紀子さんと大利根中学教師門井五雄氏が久喜市で挙式。子ども5名と職員5名が祝意を。

○　純真短期大学より見学に。

○　小・中学校の先生方の家庭訪問が、熱心に。

反射光

☆暑中お見舞い申し上げます☆バーガー京子氏の『二つの文化に生きる』が始まりました。国際化の時代にふさわしい、微笑ましいエピソードなどご期待下さい☆夏休みの四十数日間、学校から子どもたちのプライムタイムを取り戻し、子どもらしさを回復しきらめくような思い出をつくり、関係を深める絶好の機会にと身構え迎えました。旬日を経ずに子どもたちに先を越されもろくも手順や思いが崩れてしまいそうになります☆しかし、例年通り皆さまの熱いご支援に励まされ、谷本画伯のおもてなしをお受けして赤岳に挑み、府川ご夫妻や、黛氏など友人たちのご厚意で湯河原海水浴などが実現しました。人と人との関わりの不可思議と暖かさに感動の夏です☆五十年を経ての児童福祉法の改正作業の報告書を、人生五十年から八十年時代の児童の年齢の線引きや、地方自治体が必要だとしてきた単独事業の地域格差がどのように考えられるのかなどを注視していきます☆乞う、更なるご支援を！

（哲）